

めでいかすとる

Médicastre



「イワブクロ(岩袋)」

『傷ついた膵臓はよみがえるか
－ 糖尿病と再生医療－』

東北大学大学院医学系研究科附属創生応用医学研究センター
再生治療開発分野 乗北大学病院糖尿病代謝科

荻原健英先生

将来の糖尿病治療法として、傷ついた膵β細胞を「再生」させる新しい方法の開発が求められている。そのためには、膵β細胞の起源となる幹細胞を同定し、これらを分化増殖させる方法を確立する必要がある。この膵幹細胞の実体は現在、明らかではない。しかし、その起源として膵導管由来、骨髄由来などいくつかの説があり、われわれは、そのうち骨髄細胞からの膵β細胞再生に注目して検討を進めている。

最近、骨髄細胞が直接膵β細胞に分化しうることや骨髄細胞が膵β細胞の再生を促進することなどが報告され、骨髄由来の細胞が膵β細胞再生に重要な役割を果たすことが明らかになってきた。本講演では、ストレプトゾトシン(STZ)投与による膵β細胞傷害後に骨髄移植を行うことにより、膵β細胞を再生させる可能性についてわれわれの結果を紹介したい。われわれの実験ではSTZ投与により膵β細胞を破壊したマウスに、他のマウスから骨髄移植を行うと血糖の低下、膵β細胞の増加が認められたが、その際、骨髄由来の細胞が直接インスリン分泌細胞に分化したのではなく、膵島周囲に出現した骨髄由来細胞からの何らかの因子がSTZ投与後の膵島再生を促進した可能性が示唆されている。

われわれは、これらの実験のほかにも、アデノウイルスベクターを用いて、肝臓に膵β細胞分化転写因子(PDX1)遺伝子を導入することにより、肝臓でインスリンを産生させる実験を行った。この方法は膵臓を直接再生させるわけではないが、膵臓外でインスリン分泌を促進することにより、膵の負担を減らすことを目的とし、肝臓の性質を維持しながら肝細胞にインスリンを分泌させることに成功した。

近年、再生治療が盛んに研究されているが、本講演では膵臓に関する再生治療、すなわち、傷ついた膵臓をよみがえらせるさまざまな試みについて紹介したい。

職員接遇研修会

7月21日(木)から26日(火)の間の4日間、講堂において職員接遇研修会を開催した。

21日と22日は講師の荘内銀行お客様相談室CS推進担当の須佐恵美様から、“職業人としての一般教養について”また、25日と26日は荘内病院の佐藤令子看護部長から“専門職としての倫理について”講義していただいた。

各施設での問題点に即した講義をと思い、事前に要望を聴取した。それをまとめお願いしたところ、4日間で延人数301名(申込みの93%)の参加が得られ、大変好評であった。

職員も言葉使いのむずかしさ、目標を持つことの大切さ等を改めて痛感したようであり、すぐに役立ててくれるものと信じている。

最近では、新人説明会のみを実施し、接遇研修会は実に10年ぶりであったが、巨大化した医師会にとって、改めて職員研修の必要性・重要性を再確認した4日間であった。

(人事経理課長 佐藤 晴)

この接遇研修に出席して最も参考となったのが、電話応対についてでした。電話に出る際の声の高低によっても電話の相手が抱く印象が大きく変わるという事など、これまであまりよく考えずに応対していたのでとても考えさせられました。

これからは、この研修で学んだ事を生かして、CS(顧客満足度)をさらに高められるよう、常に私なりに考えていきたいと思いました。

荘内地区健康管理センター
管理課 原田 博崇

以前、臨床で働いていた時には新人研修の中に看護師としての倫理を学ぶ機会があり社会人1年目だった私は頭の中につめこむことで精一杯でした。何年か働くうちに看護師としての倫理をふまえた行動が自然に出来るようになりました。現在は訪問看護師として働いており以前と働く現場は違っても看護師としての倫理は同様であり今回の講習でその事について再確認することができ今後の看護援助につなげたいと思います。

訪問看護ステーションハローナース
訪問看護師 藤原 美恵子

「〇〇さん、お早う御座います。」何気ない挨拶。私は新人看護師ですが、最初は患者様の顔と名前を覚え、業務を安全に行う意味合いが強いものでした。その様な折、患者様から「ちょ

っと来て」と声を掛けられました。用件が済むと「あなたは声掛け易いの」と言って頂きました。今回の接遇研修で挨拶は、患者様と良い信頼関係を築き、業務を安全に実施する上で重要だと改めて痛感しました。今後もこの学びを糧としたいと思います。

湯田川温泉リハビリテーション病院
看護師 斎藤 弘康

日々利用者様をはじめ、多くの方々と接する中で、言葉づかいや態度は気をつけていたつもりだった。しかしこの研修を通して、気づいていなかったことやできていなかったことを指摘され、意識を改めるいい機会になったと思う。特に姿勢や表情が第一印象に影響を与えること、声のみで接する電話の対応では声のトーンが大切であるということのを忘れずに、気持ちのこもった親身な対応ができるように努めようと思う。

みずばしょう 総務会計課 小泉 聡子



納涼ビアパーティー

日 時：平成 17 年 7 月 29 日(金)
場 所：グランド・エル・サン

今年も去る 7 月 29 日に、恒例の第 14 回医師会納涼ビアパーティーがグランド・エル・サンにて盛大に開催されました。総合司会の石原良理事の進行で、中村秀幸理事に開会の挨拶、齋藤壽一会長に会長挨拶、伊藤末志理事に乾杯の発声をして頂きました。

余興では、黒羽根整形外科の皆さん、健康管理センター&在宅サービスセンター・湯田川温泉リハビリテーション病院・介護老人保健施設みずばししょうの新採職員により趣向を凝らした踊りが披露されました。初の試みとなる大抽選会の後、医師会役員の先生方による『サライ』の大合唱があり、福原晶子理事による閉会の挨拶で終宴となりました。

最後に、参加・協力頂きました皆様に実行委員一同お礼申し上げます。

(実行委員長 亀井 誠)



新入職員にとって、初めてのビアパーティー。余興の時は、会場に入った瞬間「人多すぎ…」と思い、それ以降ほとんど記憶がない。でも、自分を捨ててやるしかないと思っていたので、心から楽しみながら踊っていたと思う。初めは嫌で嫌で仕方がなかったあの格好も、最終的には楽しんでいった。新人 1 年目でしか経験できない、いい緊張感を味わえた事はとてもよい思い出だ。踊りは完璧ではなかったけれども、同期として入社した仲間と仲良くなれたことが、何よりもよかったと思う。実行委員の皆様、楽しいビアパーティーをありがとうございました。(庶務課 今野 篤子)

マイペット&マイホビー

—第24回—

老のたわごと

森国 トクエ

7月1日付の医師会からの連絡の中に、原稿依頼の件があった。会員各位への依頼だと思って、当分は関係ないと思いながら、何か変だと思って読み返すと、私に当てた原稿依頼であった。これは大変、延期かお断りのお願いをしようと思ったが、もういつ何が起きても不思議はない年頃、御指名を受けたのも何かのご縁と、お受けすることにした。

そして改めて辞典を引いてみた。

趣味とは「専門家としてではなく、楽しみとしてする事柄」、道楽とは「本職以外の趣味などにふけり楽しむこと」とある。と云うことは、しようもないお絵かきを、あきもせず続けている私は間違いなく道楽者に該当する。

昔、仕事と子育てと主婦業と、目一杯の日を送っていた頃は、趣味などと云う贅沢なこととは無縁なものと思っていた。丁度、子育てが一段落した頃、日本眼科学会の中国旅行に参加した。

その頃の中国は未だ旅行者も少なく、ホテルも食事も古きよき時代の名残が、色濃く残された国であった。

空港から北京への移動中、小川にあひるが数羽泳いでいた。ぼんやりとそれを見ていて、ふと、何かが違う、このおだやかで、ゆったりとした感覚は何だろう。私は不思議な気分になった。そして「時間の流れ」が違うことに気がついた。それは大きな驚きであった。同じ24時間のはずなのに、ゆったりと流れてゆく時間、あくせくと秒針の様にせわしなく時を刻む時間、私は体のすみずみまで、ゆったりとほぐれて行く様な時の流れを感じて幸であった。それから

私は毎年の様に旅に出た。とりわけ数年をかけてのローマまでの「シルクロードの旅」は、今思い出しても胸がときめく旅であった。

「暇がなく、銭がない時に、苦勞して行くのが、本当の旅と云うものだ。よい旅をした思い出のない人は年老いて話の種がない。」と誰かの言葉である。

日常の時間とまるで違う時の流れ、はるか昔のままの世界にスーっと、溶け込んでゆく異空間。そしていつの間にか心の中にたまっていた澱の様なものが消えていく。そんな心地よい旅からも暫く遠ざかっていた頃、偶然、コミセンの絵画クラブの募集のチラシを見た。「私これに行ってみる。」と云う私の言葉におどろいた夫は「何を馬鹿な事を。若い人達が迷惑する。」と大反対。1回だけと押し切って出席したものの、小学校以来の七十の手習いでは、何をどうすればいいのか？先生もさぞ迷惑だったことだろう。そのうち水彩も油彩も難しそうだし、パステルなら何とかかなるか、パステルを持ち込んだ。先生は「パステルで描いたことがないので、好きな様に自由に描いてみて下さい。」と云われて、「自分流」でやってみるしかなかった。

その頃私はいい言葉に出会った。「事を始めるのに、もうおそいと云う事はない。始めようと思った時が一番いい時だ。」この言葉に気をよくして手当たり次第に描き始めた。まるで子供がオモチャに夢中になる様に、「こんな事も出来るのか。こんな効果も出せるのか。」と時に感激し、時に落ち込んで絶望したり。そして私は気がついた。この夢中になっている時間は、旅に出て感じる時の流れと同じものだと。この

頃になると大反対した夫も、ああだ、こうだ、と云いながら結構自分でも楽しんでいた。私はたまに気に入った絵が描けると、「熟成してね。」と出来上がった絵に乾杯して眠る。翌朝目が覚めるとすぐ絵の前に立ってみる。しっとりといい感じになっている。いかにも熟成した感じだが、実は定着液のおかげで、粉っぽさが消えて色がなじんで来ただけのこと。こんな事はめったにないのだが、自分流で描いた絵に納得がゆけば私は大満足。その頃が一番楽しくて幸せな日々であった。

突然、夫が逝ってしまった。

「お前はいいものを見付けたね。絵はやめるなよ。」と云った言葉が、まるで別れの言葉の様に耳の底に残っている。

それから、どれほどの時が過ぎたのか、私は又絵を描きはじめた。

檸檬館の人物デッサンも始めた。人の顔を描くのも生まれて初めての事だったが、ここでも皆が自分流で自由に描いている。

老若男女沢山の人達を描かせてもらっているが、生身の人間を生き生きと描くと云うことは何とむずかしいことか。にじみ出る生活のにおい、情感、そんなものを感じさせる様な人物が描けたらいいな一と思っている。

まったくの偶然から始まったわたしの七十の手習いも、息切れしながらも、何とか今日まで続いている。これも道楽の楽しさがあったからこそ、と云えるかもしれない。

二つの全く違った感覚の時間を、上手に渡り歩くことで、ストレスの少ない日常を過ごしていると云えるかも知れない。残されている私の持ち時間を出来るだけゆったりと生きて行きたいと思っている。

もしかしてこのゆったりと流れる時間は、縄文の時間かもしれない。

などと、たわいもない「老のたわごと」これでお茶をにごさせていただきます。拙文におつきあい頂きありがとうございます。

荘内病院

神経内科 下畑 光輝 先生

平成17年5月1日より鶴岡市立荘内病院神経内科に着任致しました下畑光輝と申します。鶴岡地区医師会の諸先生方には既に大変御世話になりまして、感謝申し上げます。この場をお借りしまして御礼申し上げますと共に、自己紹介をさせていただきます。

私は栃木県小山市出身で、栃木県立栃木高等学校卒業後、新潟大学に入学し、平成7年に卒業致しました。以後、大学病院および関連病院での内科研修の後、平成9年に新潟大学脳研究所神経内科に入局致しました。入局後は大学病院をはじめ、福島県会津若松市の竹田総合病院神経内科、新潟市の信楽園病院神経内科、国立療養所西新潟中央病院（現独立行政法人国立病院機構西新潟中央病院）に勤務致しました。特に前任の西新潟中央病院では、進行期の神経変性疾患の患者様のケアを中心とした診療を行っておりました。この間、平成11年に大学院に進み、大学院では卒業まで研究中心の生活を送っておりました。

私の研究テーマは、遺伝性脊髄小脳変性症の一つである歯状核赤核淡蒼球ルイ体萎縮症(DRPLA)における転写障害を、培養細胞を用いたDRPLA蛋白の一過性発現系を用いて解析するというもので、主にCREB依存性転写活性をウエスタンブロット法により蛋白レベルで検討しておりました。DRPLAを始めとするポリグルタミン病では、ポリグルタミンを含む病因蛋白が、神経細胞内の転写障害を来すことが発病の機序ではないかと考えられており、この障害された転写活性の回復が、治療に結びつくものと考えられております。なかなか根本的な治療が確立されず、対症療法に終始しがちな神経変性疾患を始めとする神経難病

の治療ですが、最近では疾患毎にモデル動物を用いた病態解析や治療研究が盛んに行われており、遠からず神経難病の新たな治療法が確立され、臨床にフィードバックされる日が来るものと期待しております。

鶴岡の印象ですが、私は城や城下町が好きで、中学生の頃から城郭関係の本を読んで楽しんでおりました。残念ながら鶴ヶ丘城址には建築遺構はありませんが、周囲には致道館や致道博物館を始めとする建築物があり、また城下町ならではの独特の風情を町のいたるところに感じております。さらには藤沢周平氏の小説の舞台なども各所にあり、休日には妻と5歳、3歳になる子供達を連れ回し散策しています。また、孟宗汁に始まり、さくらんぼや月山筍、山菜、最近出回り始めただちや豆と、様々な季節の味を楽しんでおりますし、寿司好きの私は市内に多数点在する寿司店めぐりが楽しみで、できるだけ多くの寿司店や割烹を巡りたいと考えておりますので、お勧めのお店がございましたら情報をお寄せ頂ければ幸いです(!)。

現在、医師会の諸先生方からは認知症やパーキンソン病を始め、頭痛、めまい、しびれなど様々な愁訴の患者様を多数御紹介頂き、また長期経過した患者様のフォローアップを御願いさせて頂いております。当院神経内科は、常勤医が私一人、また毎週月、水曜日に新潟大学から出張医が外来診療を行うという体制ですが、鶴岡地区の神経内科医療を担うには不十分な体制と言わざるを得ず、この場を借りて御詫び申し上げる次第です。もとより微力ではありますが、鶴岡地区の神経内科医療の水準を上げるべく、日々努力する所存でございます。今後とも諸先生方におかれましては御指導、御鞭撻の程、御願い申し上げます。

表 紙

「イワブクロ（岩袋）」

石 原 融

鳥海山では7月から8月にかけて外輪や千蛇谷でイワブクロの花を見ることができます。この写真は鳥海山の外輪で撮ったものです。イワブクロは、その名が示すように、高山の岩場や砂礫地など厳しい自然環境のところに生えるたくましい高山植物とされています。

～ 編集後記 ～

蒸し暑い日が続いています。納涼ビアパーティーは如何でしたでしょうか。第14回を数え、参加者も320名と膨れ上がりました。それに反して以前は多かった医院や病院その家族、従業員の参加が少なくなってきました。今後のパーティーのあり方を再検討する時期かもしれませんね。組織が大きくなればお互いの意思疎通もまた難しいようです。

マイペットマイホビーも会員の方からは是非、投稿をお願いします。みなさん、長年心安らぐ「ほっとひといきタイム」をお持ちでしょう。依頼のあった際は軽い気持ちでお受けください。意外な一面が知れとても楽しみにしております。

「みずばしょう」が5月に開設以来、約3ヶ月が経過しました。今後は本誌ではなく、施設の広報誌にて近況を皆様に報告する予定と聞いております。リハビリを専門とする中間施設として地域の期待も高まっております。経営を軌道に乗せることはもちろんですが、高い意識とプライドをもって邁進してください。みんなで応援しましょう。

(中村 秀幸)

編集委員：伊藤末志・三原一郎・中村秀幸・石原 良・福原晶子

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町 1- 34

TEL 0235- 22- 0136 FAX 0235- 25- 0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町 27- 1 TEL 22- 0936(代)